



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

### 「瀬戸内海のご縁、あら不思議」

3月に大学時代の下宿生杉ヤンが突然この世界から消えてしまった。驚きはもちろんあったが、なにか淡々とした感情もあった。人は必ず死を迎えるという〈現世の道理〉を無意識に実感していたのかもしれない。

それをなぜか賢妻に伝えなかった。三日後に賢妻が言った。

「今日は杉さんの誕生日 (3/31) なので、お祝いの電話をするわ」

賢妻は毎年誕生日に電話している。わが輩は淡々と「亡くなった」と返した。賢妻は驚き、知らせなかったわが輩をなじった。それを聞いても、わが輩は淡々としていた。死を超越しているとか、悟ったとか、わが輩は哲学徒だとか、言うつもりは毛頭ない。ただ、なぜか淡々とした気持ちが占めていた。

わが輩ほどの年齢になると、寂しさは過去の記憶とともに遅刻してやって来るのかもしれない。

わが輩は四年間阿佐ヶ谷で下宿生活をおくった。東大、中央、一橋、日大、早稲田などの各大学生が下宿していた。杉ヤンは医学部をめざす浪人生であった。わが部屋は六畳一間で、ふすま戸に鍵がなかった。だから誰でも自由に出入りできた。快適にして自由奔放さにわが輩は「マンション」と呼んでいた。四月に入宿すると杉ヤンがいろいろなと説明してくれた。それで「先輩、だと思った。なんのことはない、数日前に入宿した同年生だと判明した。理系の男で、文系のわが輩とはなにかにつけて見解が分れた。わが輩にくらべて、電気であろうが、機械であろうが、器用に修理することができた。杉ヤンは二浪の末に医学部を断念して理学部に進学した。これは遊び人のわが輩にも責任がある。浮ついたわが輩の相手をしてくれたのがいけなかった、と後悔の念がのこる。

わが輩はカンニングをして無事卒業して帰郷した。翌年に杉ヤンの部屋に泊まり、そこからインドに向かった。杉ヤンは瀬戸内海の大崎上島 (広島) 出身で、退職後はレモンを栽培していた。一人暮らしなので、賢妻とレモンの収穫を手伝いにいったこともある。

「お前になにかあれば、すぐに助けに行き行ってやるから」

と言っていたが、一度も行けなかった。7月22日 (月) が新盆 (アボソ) だというので大崎上島に行くことにした。お見送りできなかったのも、せめて新盆だけでもと思った。いや、どうしても行かなければ気持ちが治まらなかった。

大家さん親族二人も同行することになった。大家さんはもともと豊島出身で、戦前から杉ヤンの親族と親交があった。それならば竹原-大崎上島-豊島-広島と、豊島を加えるコースに変更した。

新盆は菩提寺円明寺（真宗本願寺派）で執り行われた。理系の杉ヤンが「宗教心」にめざめるとは思いもよらなかったが、仏教壮年会で熱心にご奉仕していたという。ときに「信心」について哲学徒のわが輩に説教をたれるほどに学習していた。すっかりインド帰りのわが輩の御株を奪っていた。

わが輩のマントラは「お題目」で、お念仏を唱えることはない。しかし、この日だけは「なむあみだぶつ」と三唱した。そうしないと杉ヤンが西方浄土に赴けないと思った。杉ヤンを助けることはできなかったが、お浄土に送り出すことはできた、と今では思っている。

マントラそのものに優劣はない。どこが違うのかというと世界観であろう。お題目は一元論（迷いも覚りもここにある）、お念仏は二元論（迷いはこちら覚りはあちら）ということであろうか。どれを選ぶかはその人のご縁、機根（時代、素質や能力）による。

新盆がおわって、すぐに埠頭にむかった。大崎上島から高速船（15分）で大崎下島、ついで豊島に着いた。この小さな島は大家のミツエおばあちゃんの故郷である。おばあちゃんは満州でホテルを経営し「女傑」と呼ばれていた。豊浜中学校の土地や菩提寺登照寺の梵鐘などを寄進した篤信家で、今日までその高名が残っている。大長（大崎下島）から豊島までタクシーに乗車したが、運転手もその名を覚えていた。わが輩と杉ヤンは勉強もしないでおばあちゃんの部屋に入り浸っていたので、何度も「とよしま」の名を耳にしていた。それでわが故郷でもないのに懐かしい感情が湧き上がってきた。中学校は想像していたよりも広い校庭であった。その門横の石碑に「頌徳碑 中川光枝」の文字が刻まれていた。妙に嬉しくなり「孫娘のだれでもよいからもらってくれ」と言われことなどを思い出した。

登照寺（本願寺派）を訪れたとき、興味あることが判明した。

わが輩は大阪万福寺（本願寺派）の全国的寺報『道標』の編集委員をしている。編集委員といってもI住職、A師（本願寺派布教使）とわが輩の三名である。登照寺の大黒さん（住職の妻）がA師の義妹だと偶然に分った。A師とは編集会議で二週間前に会っていた。その話をしていたとき、またまた偶然にI住職から電話があった。これは不思議！ 人のご縁がどこで繋がっているのか妙なものだ。

セカイはわが輩から始まる。死によって瞼を閉じればセカイは終わる、ことは確かな事象である。セカイはわが輩から始まり、わが輩で終わる。しかし、わが輩の「セカイ」という想念は終わっても、世界は残る。この世界はご縁（繋がり）によって成り立っている。いろいろなご縁（出会い）は、気づかなければそれで終わってしまう。自己に気づき、他者に気づけば、この現在のままで往生極楽、安心の境地だとわが輩は考える。

記憶をたどれば、おばあちゃん、杉ヤンとの出会いは不思議なものだ。この記憶という想念を、瞼を閉じるまで大事にしたいものである。